



京都大学
KYOTO UNIVERSITY

総合人間学部／人間・環境学研究科
Faculty of Integrated Human Studies / Human and Environmental Studies

No.

67



2021.10

総人・人環 広報

特集 新任の先生方より

迷路に舞い戻る.....	菅 利恵.....	2
新任のごあいさつ.....	小山田 耕二.....	3
着任のご挨拶.....	小野寺 史郎.....	4
「まち」のように学ぶ.....	前田 昌弘.....	5
「ホンモノ」を体感しよう.....	清野 孝之.....	6
還暦の新任ごあいさつ.....	広井 良典.....	7
吉田南2号館とのご縁.....	藤井 悠里.....	8
令和二年度総合人間学部卒業論文・卒業研究題目一覧.....		9

新任の先生方より

迷路に舞い戻る



2021年4月に三重大学から着任いたしました。京都大学には学部の頃から在籍し、文学部独文学科から人間・環境学研究科の院に進みました。三重大学に就職するまでは京大でドイツ語の非常勤講師もしておりましたの

で、今回私にとってはとても馴染み深い場所に戻ってきたこととなります。ただ、京大にいたころはずっと、たどり着く先が見えないふわふわした感覚がいつもどこかにありました。今またキャンパスを歩くと、ようやく抜け出したはずの巨大な「迷路」に、また舞い戻ってきたような不思議な感覚があります。

大学入学時は、なぜか「文学」という選択にまったく迷いはありませんでした。世の中に本以外に面白いことがあるとは思えず、文学部に行くのは当然のことだと思っていました。しかし実際に文学部に入り、作品をただ楽しむのではなく「論じる」ようになり、「感想文」ではない「レポート」を、そして「卒業論文」を書くうちに、自分は「文学」でなにをしたいのかよくわからなくなりました。深く論じようとする、作品それ自体よりも時代背景や背後を流れるテーマの方が気になり、いつの間にか作品がどこかに行ってしまうからです。

そのまま「文学」を続ける気にはなれず、まだ新しかった人間・環境学研究科の院に進みました。「文学」も謎でしたが、ジェンダーや家族制度も謎だったので、田邊玲子先生のゼミに入りました。自分がやりたいのは「文学」よりもむしろ「歴史」なのかもしれないと思って、「歴史の資料として文学を読む」スタイルでいこうと、18世紀後半に流行していた家庭劇を読み始めました。でも読むう

菅 利恵

(総合人間学部 人間科学系)

人間・環境学研究科 共生人間学専攻)

ちにまたわからなくなりました。「資料」として読むといっても、それぞれに独特の文体や論理があり、書いた人固有の事情もあります。そうしたものにじっくり付き合っていると、結局やっていることは「文学」とかわりません。

そんな調子で、迷子のような状況が続きましたが、先生は根気よく付き合ってくださいました。独文と社会史、どちらの専門領域にもアクセスできるような気を配ってくださり、美味しいものもたくさんご馳走になり・・・当時はあまり周りが見えていませんでしたが、いま思えば恵まれていました。他の院生とは、ジェンダー論の本と一緒に読みました。暇さえあればジェンダーについて考えているような人たちで、私が知らなかったものの見方や本や人を教えてくれました。おそらく、独文に進んでいたらできなかった経験です。

一度は「研究に向いていない」と大学を離れましたが、不完全燃焼の感じが気持ち悪く、結局研究に戻り、今にいたっています。「学」の枠組みが不確かに思えても、気になるテーマを追いかけて、気になる文献を読み込んでいけば、いつの間にかまとまりのある成果にたどり着くものだと、経験からわかってきました。

着任してまだ半年、しかも半分くらいオンラインだったのでなんとも言えませんが、行儀の良い学生が多い中に時々飛び抜けて意欲の高い学生が混ざっていて、面白いです。優秀な彼らに必要なものは、なによりも、新しいことに目を開かせてくれる出会いや、自分の方法論を研ぎ澄ますための、対話や議論の相手でしょう。そんな相手の一人になることができれば、「迷路」に戻ったかいもあるかと思います。それに、どれほど優秀でも道に迷うことはあるかもしれません。私は人よりも長く迷っていましたが、だからこそ、そういう時の話し相手になれるのではないかと思います。

(すが りえ)

新任の先生方より

新任のごあいさつ



現在、私は、学術情報メディアセンターのコンピューティング部門に所属しています。人間・環境学研究科（共生人間学専攻・数理科学講座・数理情報論分野）では2021年4月より協力教員としてお世話になっておりま

す。研究としては、可視化ですが、少し説明したほうがよいですね。可視化は、1) 興味のある現象からデータ化し、2) そのデータを人間に認識させるために画像化し、3) その画像を認識した人間による重要な特徴への気づきや意味ある行動変容を促進する役割を担います。第1の役割は理・工・医学と、第2の役割は情報科学と、第3の役割は認知科学と関連が深い。可視化研究は、学際的な側面を強く持ちます。

可視化が研究対象であるためには、明確な研究問い（Research question: RQ）が存在し、その仮説の有用性を測定するための尺度を定義し、それを測る手段を持つ必要があります。第1の役割に関係するRQは、“どうすれば、興味深い現象からデータを取得できるか？”であり、理・工・医学と関係が深いです。第2の役割に関係するRQは、“どうすれば、効率よく、データから画像に変換できるか？”であり、情報科学と関係があります。第3の役割に関係するRQは、“どのような画像が、人間に気づきを起こさせるか？”であり、認知科学と強い関係があります。

さて、私は、1985年本学工学研究科電気工学専攻を修了し、日本IBM（株）に入社しました。まず、システムエンジニアとして、IBM製造業ユーザー向けに情報技術の利活用を支援し、その後、東京基礎研究所に異動し、コンピュータグラフィックス技術を使った可視化技術の研究開発に従事し、その研究成果をもとに、1994年工学博士（京

小山田 耕二

（学術情報メディアセンター／

総合人間学部 認知情報学系／

人間・環境学研究科 共生人間学専攻）

都大学）を授与いただきました。

13年間、日本IBMにお世話になって、1998年岩手県立大学ソフトウェア情報学部助教授に着任し、地域に根差した教育・研究に従事しました。2001年大型計算機センター研究開発部助教授として着任し、情報学研究科システム科学専攻の協力講座に所属し、大規模シミュレーション結果の可視化技術を研究しました。2003年に、新設された高等教育研究開発推進センター情報メディア教育部門の教授に着任しました。同時に、工学研究科電気工学専攻の協力講座を担当しましたが、研究室は、吉田南構内に設置いただきましたので、人間・環境学研究科の先生方とのお付き合いが増えていきました。特に、総合人間学部元学部長林哲介先生が立ち上げた教育交流会にも参加させていただき、学生とともに考えた新しい講義“自主研究ゼミ（のちに研究の世界入門）”を全学共通教育で実践したことを大変印象深く記憶しています。2011年高等教育研究開発機構に異動して、研究成果発表の場：国際学生シンポジウム（2010－2014年）の企画運営を担当しました。

新設された国際高等教育院を経て、2015年に学術情報メディアセンターに戻ってから、人間・環境学研究科からは遠ざかっていましたが、学術情報メディアセンター教授、共生人間学専攻・言語科学講座兼任でいらっしゃった壇辻先生の退職後、人間・環境学研究科担当のお話が進み、この4月より協力教員に就任させていただくことができました。定年を考えると還暦前にお世話になりたかったのですが、まずは、工学研究科から人間・環境学研究科に移ってもらった大学院生（D1：2名、D2：1名）の指導をすすめたいと思います。不慣れなことも多く、時にまとはずれな質問をさせていただくかもしれませんが、その折は、どうぞよろしく願いいたします。

（こやまだ こうじ）

新任の先生方より

着任のご挨拶



2021年4月に埼玉大学教養学部より着任しました。専門は中国近現代史です。

もともと岩手県出身で、東北大学を卒業、東京大学の大学院で学びました。その後、京都大学人

文学部で助教をしておりましたので京都大学にも縁はあったのですが、総合人間学部、人間・環境学研究科に所属するのは今回がはじめてです。そのため着任当初は、吉田キャンパスは知っているのに吉田南キャンパスの勝手がわからないというあまりなさそうな状況に陥っておりました。国際文明学系／共生文明学専攻現代文明論講座文明構造論分野で文明動態論を担当という自分の所属に至ってはいまだに暗記できておりません。なお担当している授業は主に1・2年生向けの中国語です。もっとふさわしい方がいらしたのかもしれませんが、採用していただきましたからには、この場所で研究に教育に力を尽くす所存です。

目下研究の上で関心をもっていることの一つは、近現代中国のナショナリズムとミリタリズムに関わる思想や政治文化の問題です。現代の中華人民共和国では、ナショナリズムはインターナショナリズムと矛盾しないという考え方が一般的です。また、「中華民族酷愛和平（中華民族は平和を熱愛する）」という自己認識が定着しています。しかし、経済的にも軍事的にも大国化し、世界に対する影響力を拡大している中国とアメリカや近隣地域との緊張関係という現実の下、中国の自己認識に疑問を感じる国外の研究者は少なくありません。こうした中国のナショナリズムや戦争・平和に対する考え方は、20世紀前半の中国の知識人

小野寺 史郎

(総合人間学部 国際文明学系／

人間・環境学研究科 共生文明学専攻)

たちの議論の中で次第に形作られ、現在に至っていると私は考えています。それらの議論において何が論点となったのか、当時の中国の国内・国際的条件が議論の枠組をどのように規定したのか、ソ連から導入され、以後の中国を特徴づけた政党国家体制や党軍というシステムはどのような問題を解決したのか（しなかったのか）といった視点から、この問題に迫りたいと考えています。

私の現在のもう一つの研究テーマは、日本の中国研究の歴史です。近代以来、日本と中国それぞれのあり方、そしてそれにともなう両国関係が何度も大きく変化したことで、中国の歴史と現状に対する日本の研究者の見方も繰り返し見直しを余儀なくされてきました。中国史を長く進歩のない停滞したものとする見方、社会主義革命をゴールとする階級闘争の歴史と捉える見方、西洋や日本と共通する資本主義や民主主義の展開を重視する見方、逆に中国の特殊性を強調する見方などです。この点で日本の中国研究は、物理的にも心理的にも遠く離れた、欧米人による中国研究、日本人による欧米研究などとは大きく異なる条件の下にあったと考えられます。そして、中国に対して異なる見方を持つ日本の研究者の間では、真剣な論争や激しい衝突が繰り返されました。こうした経緯は、現在の日本の中国観にもさまざまな影響を及ぼしています。そのため明治から現在にいたる日本の中国研究の歴史の流れを明らかにすることは、現在の私たちが中国を論じる際に依拠している枠組が、どのような特徴をもつのかを知ることにもつながります。そしてそれは、自明のように思われる既存の認識枠組を相対化し、より正確に中国を理解する方法を模索するための手がかりとなると考えています。

(おの でら しろう)

新任の先生方より

「まち」のように学ぶ



今年の4月に共生文明学専攻、文化・地域環境論講座に准教授として着任しました。

専門は建築学、特に住居・まちづくりについて研究しています。京大の工学部建築学科を卒業し、その後も修士、博士

と工学研究科（桂キャンパス）で学び、助教、講師としてつとめた後、下鴨にある京都府立大学に赴任しました。桂、下鴨を経てひさびさに過ごす吉田キャンパスから受ける印象は、懐かしさよりも新鮮さが圧倒的に勝っています。総人・人環を含む吉田キャンパスは、さまざまな興味関心をもつ人たちが行き交い、明治以降の各年代の建築物・空間が積層する、ある意味で活気ある「まち」のような場所です。人と人の物理的な距離の近さが生み出す魅力、それは昔から変わらないはずですが、なぜだか無性に新鮮に感じてしまいます。

例えば先日、フィールドワークに関心があり、コロナ前は途上国の現場をたずね歩いていたという他学部の学生が、フィールドワーカーへのインタビューの企画の相談で研究室をたずねてきました。また、この夏、コロナ禍の地蔵盆に関する調査を行った際、研究室の学生を通じて参加者を募集したところ、他の研究室や学部からも応援に来てくれました。何気ないことですが、こういったささやかな交流が新鮮で貴重に感じられるのは、コロナ禍で対面的な交流の機会が減っているからなのか、私が教員という立場になったからなのかわかりません。しかし、こういった「まち」のような場所で学ぶ魅力と価値は、京大がもつ無形の財産であると信じています。

さて、私は建築学のなかでも建築計画学と言って、建築や都市・地域の「デザイン」に関わる分

前田 昌弘

(総合人間学部 文化環境学系)

人間・環境学研究科 共生文明学専攻)

野にいます。と言っても、住宅や施設の具体的な設計に直接関わることは私の場合は稀です。むしろ、設計の前提となる課題や条件の発見、建物の継続的な利用や管理のための方法等、いわば設計(つくる)という行為の前後や基礎を固める枠組みに主眼があり、関連する知見をさまざまな概念や方法を用いながら収集しています。建築計画学というジャンル自体がある意味で学際的であり、それゆえに、隣接するさまざまな学問と交流するチャンスがある反面、「つまみぐい」的になり、浅薄な議論に陥る危うさが付きまといまいます。

しかし、建築学は良くも悪くも「実学」であり、そこに強みと責任があると考えます。すなわち、建物や地域をつくる際の行政や事業者、専門家の「決定」、さらには、都市・地域に暮らす人びとの「選択」の場に近いところで研究をしているということです。地域のまちづくりや災害復興等の現場に関わりながら活動をしていると、「それは自分の専門外の話だから」という言い訳が通じない場面にたびたび遭遇します。自分の立ち位置について心もとなく感じるが多々あります。ですが、そういった「弱み」がかえって、異なる立場のひとたちと連携したり、生活者と同じ目線で一緒に物事を考えるきっかけにもなっており、最近はそのような具合に自分の強みとして捉えるようにしています。多様性や複雑さに一時的であれ身を委ねてみる、それが「まち」で研究することの作法であり魅力であると言えるかもしれません。

京大がもつ成熟した「まち」のような学びの環境のさらなる充実に微力ながら貢献していければと思います。学生たちには大学の「内」でも「外」でも、「まち」を面白おかしく創造的に楽しみながら、その将来について考えていける人材に育てほしいと考えています。

(まえだ まさひろ)

新任の先生方より

「ホンモノ」を体感しよう



私は2021年度より、人間・環境学研究科共生文明学専攻の客員教授となりました。普段は独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所に勤務し、考古学を専門として発掘調査や出土遺物の調査・研究をおこなっています。

考古学とは、過去の人類が残したあらゆる痕跡から、人間の活動や社会などを復元する学問です。みなさんには、大学の授業を通して考古学の魅力を知り、考古学的な物の見方を身につけてもらうことができれば、と考えています。分析対象とするのは遺跡や遺物といった、過去の人々が残した「ホンモノ」です。この「ホンモノ」に触れ、感じる、つまり現地に立ち、実物をじかに触ってみること、そこから生まれる感覚、発想が考古学ではとても大切です。

たとえば、日本古代史上の大事件として有名な**いっし**乙巳の変（いわゆる大化の改新）において、**そがのいるか**蘇我入鹿が暗殺された現場は**あすかいたぶきのみや**飛鳥板蓋宮ですが、発掘調査等により宮殿の場所はほぼ特定されています。私は、この歴史を動かす大事件の現場に立ったとき、歴史が立体的に浮かび上がるような感覚をもちました。また、あるとき私は古代の土器を触っていて、自分の指先が土器の表面にフィットするのを感じました。これは、土器を作った古代人の指の痕跡に私の指が重なったときの感覚なのですが、遠い過去の人々が自分の隣にいるかのように身近に感じられた不思議な瞬間でした。「ホン

清野 孝之

(人間・環境学研究科 共生文明学専攻)

独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所
都城発掘調査部 副部長・
同 都城発掘調査部遺構研究室長)

モノ」だけがもつ迫力、エネルギーのようなものを体感することができたように思います。こうした経験が後の研究に活かされていきます。これは考古学の大きな魅力といえます。

「ホンモノ」の場所に立ち、じかに触れることの大切さは、考古学だけに限ったことではありません。どの学問であっても、また学問に限らず社会生活のさまざまな場面においても、同じようなことがいえます。現代は、インターネットなどに多種多様な情報があふれ、公表された数値などのデータや画像・映像だけで分かったような気になってしまいがちです。しかし、そのデータなどの背景で何が起きているのか、より深く知るためには、現地に足を運び、実際に見たり聞いたり、可能であれば触ったりして試みるのが肝要です。

いまは世界的な感染症拡大の時期のため、国の内外を問わず遠隔地に足を運ぶのは難しい状況ですが、みなさんもぜひ「ホンモノ」の場所に行って直接体感する経験をたくさん積んでください。そしてそこから得た感覚を忘れずに、その後の研究や社会生活の中で活かしてもらえたらと思います。そうして身につけた感覚は、いずれみなさんの精神、思想を形作っていくことでしょう。また、数十年後にあらためて、同じ場所に立ち、同じことをやってみれば、現地の変化、そして自分の成長に気づくことでしょう。みなさんには、可能な限り仮想空間ではないリアルな現場に立ち、「ホンモノ」を体感する習慣を身につけていただくことを望みます。

(せい の たかゆき)

新任の先生方より

還暦の新任ごあいさつ

広井 良典

(こころの未来研究センター/
人間・環境学研究科 相関環境学専攻)



初めまして。私は今年還暦を迎えた人間で、還暦で新任の御挨拶というのもいささか珍しいと思いますが、還暦が文字通り一つの循環と新たな出発の歳ということも意識して、この文章を書かせていただければと思いま

す。

私は名前の通りといたしますか、“広く浅く”いろいろなことをやってきた人間で、様々な面で紆余曲折のある人生をたどってきました。もともと大学には法律専攻で入学しましたが、高校の頃から考えていた哲学的なテーマにまず決着をつけたいという思いが強く、科学史・科学哲学という分野に転科し、大学院修士課程まで進んだあと、10年ほど官庁に勤め、やがて千葉大学に移ることになり、そこで20年ほど勤務しました。そして2016年に京都大学のこころの未来研究センターに移り、現在に至ったわけですが、今年度から人環の協力教員を拝命させていただくことになりました。

学問的な研究を含め、私の問題意識の原点は、中学生の頃、「限りなく上昇していくエスカレーター」に乗ることを余儀なくされていることにどこか違和感を抱いたことでした。そこから派生して、物事を判断する際の究極の価値基準は何かとか、そもそも私が世界を認識しているとはどういうことかといった、上述の「哲学的なテーマ」に迷い込んでいったことになります。そうした意味では、“中2病”的な関心で還暦まで至ったと言ってもよいかもしれません（文系の研究者にはそれは珍しいことではないかもしれませんが）。

最近、脱成長とか、SDGsといったことが広く一般に議論されるようになっていますが、私の場

合、上記のような関心が基本にあったことから、40歳になった時に出した『定常型社会』という本を含め、高度成長期のような経済や人口の「限らない拡大・成長」の時代の後に開ける、いわばポスト成長社会というものをどのように構想するかということが研究テーマの軸の一つでもありました。日本にそくして見れば、日本は現在世界の中で“人口減少社会のフロント・ランナー”となっており、ジャパン・アズ・ナンバー1とまで言われた昭和的モデルの成功体験からいかに転換し、将来世代にツケを回すことなく成熟社会の豊かさを実現していくかが中心的な課題と思われ、そうしたことを政策や制度、地域のあり方などを含めてさらに深めていきたいと思っています。

また、もう一つの関心の軸が「死生観」に関することから、以上の話題とはかなり異なっているように響くかもしれませんが、「限らない拡大・成長」ということを個人の生においても追求していくのか、あるいは有限な人生の中での充実を図っていくかという点では、上記の経済社会をめぐるテーマとも通底する部分があり、還暦という話題ともつながりますが、新たな視点でさらに深めていければと考えています。

冒頭のところで本学に2016年に来たことを記しましたが、その年から総合人間学部の現代社会論という授業を毎年担当させていただいています。総人の学生は、学問分野の枠を越えて様々なことに興味を持ち、かつ暗中模索を続けているような学生が多く、ちょうど先ほど記したような学生時代の自分自身を思い出させるような感覚があり、楽しく授業を担当させていただいてきました。来年度からは大学院の授業を担当することになりますが、どうぞよろしくごお願い申し上げます。

(ひろい よしり)

新任の先生方より

吉田南 2 号館とのご縁



2021年1月1日付で自然環境動態論講座に助教として着任し、吉田南2号館の4階に居室を頂いています。本稿では、総合人間学部/人間・環境学研究科の出身ではない私が吉田南2号館とのご縁を感じたエピソードを2つご紹介しようと思います。

1つ目は、私に研究のいろはを教えてくださいました恩師を通じた間接的なつながりです。私が修士課程の学生として名古屋大学の理論宇宙物理学研究室に入ったのと同じタイミングで、博士（人間・環境学）の学位を取得されたばかりの奥住聡氏（現・東京工業大学准教授）が学振SPDとして着任されました。指導教員の犬塚修一郎教授がおっしゃった「君たち、彼は既に助教レベルだから5年後にこうなってなくても凹まなくていいからね。」というお言葉の意味は、何も分かっていない当時の私には深くは理解できませんでしたが、天文学会や惑星科学会に出るようになり、次第にコミュニティにおける奥住さんの存在感の大きさを実感するようになりました。そして、当時の奥住さんと同じ歳になった時、大学院に入ったばかりの頃の私たちへの犬塚さんのお言葉に救われる事になりました。そんな奥住さんの師匠である阪上雅昭先生の研究室が3階にあることを発見し、ここがあの奥住さんを育てた建物だったのかと、妙に感慨深く思いました。

2つ目は、高校生の頃の話に遡ります。自然科学部の夏休みの活動として、当時人・環の大学院生でもあった顧問のひとりの飯澤功先生の研究室に何日か通い、気圧や温度を計測する装置を作成

藤井 悠里

(総合人間学部 自然科学系/

人間・環境学研究科 相関環境学専攻)

するという機会がありました。実は、現職に応募した際に先生方の研究内容について調べている中で、もしかするとは思っておりましたが、その研究室はやはり酒井敏先生の研究室でした。作成した装置は用途があるとのことで回収されましたが、モヒさん（モヒカンだった大学院生の方）が設計された基盤の名前 Ritchie Black Mohi は何故か覚えており、先日、その名前を何気なく酒井先生に告げたところ、「ああ、これでしょ？」とその場ですぐに出てきました。まさかもう一度お目にかかるとは夢にも思っていませんでした。また、臚げな当時の記憶と照合するに、その際に作業に使用した部屋は、私が前期に担当した地球科学実験「惑星」テーマで使用した地球科学第2実験室だったと思われます。部屋割は、私が考えたテーマが部屋を砂だらけにしてしまうものであるという理由で決まったのですが、これには不思議なご縁を感じてしまいました。

これまで私は、宇宙物理学・天文学・惑星科学の理論的な手法を主とした研究を行ってきました。惑星やその周りの衛星が形成された過程を探るために、その形成環境をシミュレーションしたり、モデル化したりしています。人・環では、地球科学グループに迎え入れて頂き、新たな環境で刺激的な毎日を送っています。特に、総人ゼミでは小木曾哲先生、石村豊穂先生にお供し、ハンマー片手に学生と一緒に山に登る、断層に沿って地形を観察しながら歩くなど、初めての経験が目白押しです。今後も、多くの先生方、学生のみなさんとの関わりを通して、世界が広がっていくことを楽しみにしています。どうぞよろしく願いいたします。

(ふじい ゆり)

総人環

編集後記

◆『総人・人環広報』第67号をお届け致します。今号では、新しくお迎えしました7名の先生方からのメッセージを掲載致しました。今年度もオンラインでの授業や会議が多く、直接お目にかかる機会が限られています。メッセージを通して、交流の一助にして頂けると幸いです。

また、令和二年度総合人間学部卒業論文・卒業研究題目一覧の掲載も致しました。コロナ禍における研究活動には様々なご苦労があったことと存じますが、その中での成果ですので、今後のご参考にいかがでしょうか。

(F. Y.)

総合人間学部
人間・環境学研究科

広報委員会